

## 「外国語で国際体験」レポート 京都嵐山妙林寺 植田観肇

職 業：僧侶

滞 在 先：GNE日蓮宗仏教サンガ（米国ボストン）

期 間：2013/10/25 - 2013/12/10

滞在目的：海外での布教活動を日本での布教に生かすため

### はじめに

最近、いろんな雑誌でお墓やお葬式などの自分の死を見つめる特集が組まれているのを目にします。お葬式の話など縁起でもないと言っていたのは今は昔、だんだんと積極的に自分の死を考えるようになってきているのかもしれませんが。しかし、それとは裏腹に日本人のお寺離れや宗教離れといった事も盛んに言われており、お葬式やお墓の話が宗教やお寺から離れ、ただの商品やサービスとしてしか認識されていないのではないかと感じることも多々あります。

では、お葬式に依存することができないキリスト教圏の布教の場ではどうなっているのだろうか。そんな疑問を抱えていた時、アメリカで活躍されるお上人からこの「外国語で国際体験」プログラムをご紹介頂き、実際の現場の布教を体験することができました。日本の「常識」が通じない場所での布教は、私にとって仏教の本質を改めて考えさせられる大変興味深い体験となりました。以下に、滞在先の寺院での取組の一端と私の感想をご紹介します、皆様の布教の一助として頂ければ幸いです。

### 滞在先を取り巻く環境

今回滞在させて頂いたのは、フォーコナー龍央上人のおいでになる米国マサチューセッツ州 GNE 日蓮宗仏教サンガです。私が本寺院を選んだのは、渡米した日本人のためではなく、現地のアメリカ人に対して積極的に布教をしている寺院の一つだからです。日本人がいると必然的に布教方法も日本的になってしまうのではないかと考え、あえて日本人の全くいない寺院にお世話になることに決めました。そのため、今回の滞在期間の一ヶ月半、周りの方と一度も日本語で会話をすることはありませんでした。

ちなみに私の英会話のレベルは、挨拶もろくにできないレベルで、受験勉強を最後にここ十数年ほとんど英語を使ったことはありません。今思うと大変失礼な話で、私の英語レベルが低いせいで、ご住職のフォーコナー龍央上人や支えてくださった皆様には色々ご迷惑をお掛けいたしました。誌面をお借りしてお礼とお詫びを申し上げます。

さて、本寺院は米国ボストンの郊外の町ヘーバリアルにあります。ボストンはまさにアメリ

カの歴史が始まった都市であり、アメリカの歴史はボストン抜きには語れません。また、ハーバード大学や MIT など世界的に有名な大学が数多くあり、世界各国から大勢の学生が集まっています。反面、カンボジア人を除いてアジア系の方はあまり見る機会が無く、大きな日本人コミュニティもありません。

蛇足ですが、米国の日本人コミュニティは近年減少傾向にあります。その理由は、日系二世以降の方は日系の「アメリカ人」として生活される方が多いためです。そのため、日系二世以降の方の多くは日本語で会話はなんとかできるが、漢字混じりの私達が日常的に使う日本語はほとんど読めないようです。また、信仰する宗教も日本語を必要としないキリスト教に改宗したり、無宗教になってしまう方も増えているようです。もともと日本人コミュニティの小さかったボストンエリアではそれが顕著に現れており、日本の伝統仏教寺院でまともに宗教活動ができていた所はほとんどないようです。そのことから、この GNE 日蓮仏教サンガは、布教の現場の最も厳しい場所の一つと言っても過言ではないと思います。

この厳しい環境の中、現地の信仰を集めることができているのは、日蓮宗の布教の本質を突き詰めていった結果であると考えます。ここでその取組と特徴をご紹介します。

## GNE 日蓮仏教サンガの取組

### 1. 檀信徒とのコミュニケーション

キリスト教社会でもあるアメリカでは、毎週日曜日に教会に行くのが一般的ですが、それは寺院でも同じです。日曜日には毎週ご信者様が集まってきて一緒に法要を行います。法要のあとは必ず、お茶を飲んだり食事をしながら信者さんと交流を深めます。このときに龍央上人は必ず質問がないか、ご信者様に問いかけます。そして、出てくる質問に一つ一つ丁寧に回答され



ます。ここで驚いたことは、ご信者様からの質問がとても多いことです。国民性もあるのかもしれませんが、例えば「死んだらどうなるのか」「輪廻とは」「縁とは」「今日読んだお経の内容は」など様々な質問が次々とでできます。これは国民性の違いだけではなく、ご信者様としっかりコミュニケーションをとり、一つ一つの質問に誠実に回答しているからこそ、また次の質問が出るという好循環が生まれているのではないのでしょうか。日本のお寺ではなかなかゆっくりと檀信徒と語らう機会がとれず、後回しになってしまっているこ

とも多いですが、布教の最も基本的な姿勢をここに見た気がします。

## 2. 開かれたお寺

さて、毎週の行事はこれだけではなく、唱題行や初心者向けのお経練習もしておられます。また、月例の行事としては、仏教の成り立ちから各宗派の違いまでわかる初心者向けの仏教講習会や突っ込んだお経や御遺文の解説をする中級者向けの仏教講習会、さらには写経会や子供向けの歌を取り入れた法要など様々な定例行事が行われています。これらはご信者様が参加



しやすいように、日曜日のお昼や平日の夜に行われています。特筆すべきは、これらの行事は全てインターネットで公開しており、誰でも参加できるようになっています。そのため、特定のご信者様だけでなく、少なくとも私の滞在期間中は、ほぼ毎週のように新しい方が参加されておりました。なかには単なる興味本位で来られる方もあり、当然全ての方がご信者様として定着するわけではありません。しかし日蓮宗がマイノリティである米国で、日蓮宗を広く知ってもらうためには、これ以上無い素晴らしい取り組みであると感じました。日本においても檀信徒がお寺に来る機会が法事とお葬式くらいで、ほとんど布教らしい布教ができないお寺も多いかと思えます。ですが、その中でもまだまだ可能性を追求する余地があると感じました。

## 3. 対機説法

三つ目の特徴であり最も大事なことは、これらの行事は全て現地の言葉である「英語」で行われているということです。法要も一部の声明や読経を除いて全て英語で行っており、お経本もほとんど英語です。仏教について説明するときも一部の専門用語を除いて英語のみの説明をされています。その他にも随所にアメリカ人がわかりやすいような工夫がされています。そのため、初心者アメリカ人でもすんなり内容に入ることができます。日本人がお経本を作ると、どうしても日本語が必要だと考えてしまいます。しかし、お釈迦様も日蓮聖人も常に対機説法で布教をしておられました。相手にあわせて何が最も大切なのかを突き詰めた結果、このようなスタイルに進化してきたのではないのでしょうか。お経本を作るにしても内容を詰め込んでどんどん増やすことは誰でもできますが、減らすのは哲学と勇気が必要です。日本の布教の現場でも色々工夫されている方は多いと思いますが、自分の置かれた環境でお題目を広げていくために、何が最も大切なのかを突き詰める事の大切さを感じました。本当に大切なものを伝えるためにノイズとなりそうな部分を思い切って削るというのも、一つの方法なのだと思われ、頭をガツンと殴られたような衝撃を受けました。

## その他の取り組み

龍央上人は対外的にも様々な活動をされており、もっとも力を入れておられるのが Interfaith（諸宗教間の相互理解）の活動です。カソリックやプロテスタントだけではなくユダヤ教やイスラム教など様々な宗教の指導者とお互いの相互理解を深めると共に、協同で感謝祭（サンクスギビング）のイベントを開いたり、世界の様々な国で行われている殺戮について広く知ってもらう活動などをされています。



私も滞在期間中の全ての会議に参加させて頂きましたが、感謝祭のイベントでは地元の新聞にも取り上げられるなど Interfaith の活動は現地でも注目を集めています。また、殺戮についての勉強会においては、ルワンダ問題についてのドキュメンタリー映画を見て内容の発表をさせて頂き、私自身大変勉強になりました。Interfaith の通常の活動の中ではイスラム教の指導者の方から礼拝堂の案内をして頂いたり、各宗教の祈りの姿を間近で見ることができました。普段の生活では決して知ることがなかった世界に触れることができ、これだけでもアメリカに来て良かったと思える体験でした。

## 結びに代えて ～外国語で国際体験をオススメする理由～

誌面の都合上、全ての体験をお伝えすることができないのは残念ですが、以上のように布教の最前線で実施されている三つの特徴をご紹介しました。これらは一見あたりまえの事ばかりですが、突き詰めて考え、それを実行していくのは並大抵の事ではありません。これを無理なく自然な形で行っている現場を体験できたことは、これからの布教を考える上で、私にとっての大きな糧となりました。「外国語で国際体験」に参加したこの数週間が私の心の中の大きな転換点となることは間違いありません。

上記以外にも、本プログラムのメリットはたくさんあります。まず、アメリカに来る前は挨拶すらまともにできず、何か上手く話せないと恥ずかしいような気がしていました。しかし何かを本当に伝えたいとき、英語は大切な「道具」であり、下手でもいいのでまずは道具を使い前に進むことが大事だと、認識を新たにすることができました。また、ボストンという土地柄、アメリカの開拓民時代からケネディ暗殺まで、アメリカの歴史については数多くの博物館や史跡があり、多くの史料に触れることができました。さらに、渡米した時期のタイミングがよかったため、多くのイベントがあり、ハローウィン、サンクスギ

ビング、ハヌカ、ブラックフライデーと日本ではなじみの薄い祭りが、アメリカ人にとってどういう意味がありどんな歴史があるのかなど、日本では感じるこのできないレベルで実感できました。もし少しでも興味がある方は、是非このプログラムに応募してみることをおすすめします。

最後に、今回無事に本プログラムを終えられたのは関係者の皆様のご協力と多大なるご尽力のおかげです。特にお世話になりましたフォーコナー龍央上人始め、ニールさん、エリザベスさん、マークさん、クリスティーンさんには心から感謝いたします。また、本プログラムを勧めてくださった金井勝海僧正、事前の調整を頂いた宗務院伝道部国際課の皆様のご支援に深謝いたします。

平成 25 年 12 月吉日